

「家具がつなぐ、思いと景（けしき）」

菅野 佳奈子

2025年で創業85年を迎える「桜木家具」は、江戸時代から続く岩谷堂筆筒の伝統を継承する家具店。奥州市にある本店のほか、沿岸部の大船渡市、陸前高田市に店舗とショールームを構えている。海沿いの町に店を構えたのは、漁業が盛んだった昔、船頭が家具を船員に配るという風習があったためだ。しかし、東日本大震災により沿岸の2店舗が被災し、2年の時を経て大船渡店を再建させた。

大船渡店の店長・高橋勇樹さんは、2024年10月から同社の代表取締役も務める4代目。柔らかな物腰に、真っ直ぐな瞳が印象的だ。彼が店の再建にあたって掲げたコンセプトは「家族みんなが楽しく買い物できる店」。店内には職人が丹精を込めて作った岩谷堂筆筒や品質の高いベッド、流行を意識したテーブルウエア類のほか、茶目っ気ある動物の置物も並んでいる。高橋さんは、「おじいちゃん、おばあちゃん、息子夫婦とお孫さんたちが、ワイワイと会話しながら商品選びする様子を想像して店づくりをしています」と微笑む。

婚礼筆筒、学習机や子ども用ベッド、子どもが成人し家を建てれば、両親の援助で家具を購入する。生涯を通したお客様との付き合いがあるのだと、高橋さんは先輩社員から教わった。「家具を買う」という行為には「大切な人の幸せを願う気持ち」が込められていることを、誰よりも知っているからこそその店づくりなのだ。

高橋さんの祖父、伯父、父親は共に筆筒職人で、伯父に至っては一度途絶えた岩谷堂筆筒の技術を復活させた人物。父親が大船渡店、母親が陸前高田店を経営しており、高橋さんも、子どものころから家具配達の手伝いをするなど家業を継ぐことを意識していたという。しかし、本来は自分に自信が無く、人と喋ることが苦手な性格。「自分が接客して商品を買ってもらうことなど想像できなかった」と振り返る。

転機となったのは1999年。大学3年生だった高橋さんは、「いずれは岩谷堂筆筒を海外進出させたい」という思いからオーストラリアとイギリスに留学し、イギリスではトラファルガー広場を行き交う人々を対象に家具の嗜好アンケートを実行した。片言の英語で、必死になって現地の人にプレゼンすると、相手は高橋さんの熱意に応じて協力してくれた。「自分の思いをきちんと伝

えることこそ、大切なんだ」。言葉の通じない世界での経験が高橋さんの意識を変えたのだ。そして帰国後、大学を卒業し桜木家具に入社すると、接客も自信をもって行えるようになっていたという。

震災で母を、同年に病気で父を亡くしながら、必死に店を立て直し突き進んできた14年。今では「誠実な高橋さんから家具を買いたい」という方や、震災前からの常連さん、口コミの良さを聞きつけた新規のお客様など、様々な方が来店してくれるという。それは「信用と義理人情が一番大事だ」という父の言葉が、高橋さんの中に生きているからだろう。

家族で食卓を囲み、ソファでくつろぎ、心地よいベッドで眠りにつく。そんな日常の「景（けしき）」に欠かせない「家具」の存在。共に人生を歩むものだからこそ、思いのこもった人から買いたいものだ。

【まちおし AWARD 添削プログラムを受けての感想】

取材に協力して下さった高橋さんとは付き合いが長く、主観を除いて「家具屋さんとして人生を重ねてきた高橋さん」を引き出すのが難しく感じておりました。今回、先生方に添削を頂いたことで、元々の文章が「家具屋さん」の内容にスポットが当たりすぎていたと気づくことができました。

添削を元に修正したことで、高橋さんの温かさや背負っているもの、人柄がグッと出て、バランスの良い文章になったと思います。私自身はまだまだ勉強が足りないと感じているところです。お忙しい中、丁寧に添削頂いた先生方に感謝申し上げます。

菅野 佳奈子